



ペンを持つのがいじりな
十月九日の事態は、本学か
の教育、研究、学問の自由
の喪失である。

予期せぬ形で、八月三日から
日、学生を擁護する。一いつの
書々として進められた。

八月三日、民が「民主主義は
つハム」だ、と叫び、多教を
ともば、千五

形骸化された教授会

農学部 山本大二郎

百年前のエル
ザシムキリ
ユタヤ入産
今と同じよう
である。

「キリストは、パン、ワイン」と叫ぶ
なキリストを演劇した。「社会
ノ」大学教育の植民地主義を
大学立法は臨時措置のまをた
強硬を振っている。

農学部では学部長が少教のメン
たは、個人の間断で「生田地区
入」の同意を十七日に取って
月八日に臨時教授会を求め、十
論、卒業のものを、学生の「形
本教授会である。教授会の権限

役員になり二介の教員が、意見
なつたわけで、中央集権制の
らの「モラル」はすでに存在
た。大学の危機という簡単な
三月のストライキ中、私はし
をへ、講義の語の討論集に
た。いつのどの逆反教授の
人の「つ」は、つ、つ、つ、
選挙のたびに「つ」を、つ、
間の沈黙の壁を破ることも、
ことがある。政治を引合に出
あろうが、われわれにと
て必要なのは沈黙の壁を
破ることでなく、なかつた

聞かぬこと、第二次大戦中
「校歌」の二番の音階が禁じ
ままにそのような時代が
——「つ」はその時代に
者は、歴史的に振り返れば、
とれるはずである。
十月九日を境に、もう体制
子では済まされなくなった。
キリストを演劇した国家権力
殺されていく。
(分析化手)

二十世紀の終りにあつて、どの
ねばならぬかを、私は私なりに
ある。

しかも荒廃化した大学の内にあ
でもすれば、つ、つ、つ、つ、
に直面しても、冷嘲を、夢は
よつと思ひつ、つ、つ、つ、
そつしたなかで、本学の討論、
経緯をとおして、現在の学生
学生が大学の改革を模索し、
て行動する
真摯な態度
にたして
は、それが
誰れであ
ても、認め
なればならぬ、そこの学はな
い、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
しかし、そこには必ず謙虚と
信は、つ、つ、つ、つ、つ、
没しかねないこととわかれ
人間が大学なり社会の責任を
史の教えるべきである、その
とその経緯に、つ、つ、つ、
のつ、つ、つ、つ、つ、つ、
したがつ、それは単なる目標
なるもの、つ、つ、つ、つ、
を標榜する、つ、つ、つ、つ、
私に「つ」からの責任が求め
るであらう。つ、つ、つ、つ、
得ないし、つ、つ、つ、つ、
はなからうか。

謙虚さと自信持て

大学院 職員 宗進



き、私
の事実の前
に、われわ
れの責務
が、「現任」

ただ「つ」に「つ」について、
がある、つ、つ、つ、つ、
それは、「つ」の恐怖の中の
と福地があり得ない、つ、
のかを知れな。

「つ」のつ、つ、つ、つ、
い、つ、つ、つ、つ、つ、
その「つ」のつ、つ、つ、
か。
た、つ、つ、つ、つ、つ、
この社会を、つ、つ、つ、
私に「つ」からの責任が求め
るであらう。つ、つ、つ、
得ないし、つ、つ、つ、
はなからうか。